

25053C

ギファブラバチの大量増殖と生物農薬としての利用技術の開発

1 代表機関・研究総括者

(独) 農研機構野菜茶業研究所・武田 光能

2 研究期間：2013～2015 年度（3 年間）

3 研究目的

ギファブラバチの大量増殖・製剤化技術、利用法を開発して生物農薬に登録し、ピーマン類のジャガイモヒゲナガアブラムシを防除するギファブラバチの放飼法や利用法をマニュアル化して産地に普及させる。

4 研究内容及び実施体制

① ギファブラバチの大量増殖法の開発と製剤化、バンカー開始セットの開発

ムギヒゲナガアブラムシを用いた大量増殖法の開発、飼育系統の寄主選好性・産卵特性を解析し、バンカー開始セットを開発する。

(野菜茶業研究所、琉球産経株式会社)

② ギファブラバチ利用技術の開発

ギファブラバチ放飼による速効的効果の要因解析とバンカー法による待ち伏せ型防除を用いる作目ごとの体系化と現地実証を行う。

(野菜茶業研究所、長野県野菜花き試験場、岐阜県農業技術センター、鹿児島県農業開発総合センター)

③ ギファブラバチ利用マニュアル等の作成

ギファブラバチ放飼時期や効率的な使用法、多発時の速効的効果の利用法、バンカー法設置を含めた利用技術全体をマニュアル化する。

(野菜茶業研究所、長野県野菜花き試験場、岐阜県農業技術センター、鹿児島県農業開発総合センター、鹿児島県農業開発総合センター普及情報課)

5 達成目標

天敵利用を核としたピーマン類 IPM の最後の関門であるジャガイモヒゲナガアブラムシ防除にギファブラバチ・バンカー法を利用することで天敵利用を核とした IPM 体系を完成させ、現地に広く普及させる。

6 期待される効果

IPM 体系で発生するジャガイモヒゲナガアブラムシの被害(粗収益の5%)をギファブラバチ・バンカー法による待ち伏せ防除で半減させ、目標とする普及面積(200ha)で高い経済効果(2.5億円)を得る。

25053C

ギフアブラバチの大量増殖と生物農薬としての利用技術の開発

ジャガイモヒゲナガアブラムシに加害されたピーマン(5%減収)



出荷できない果実

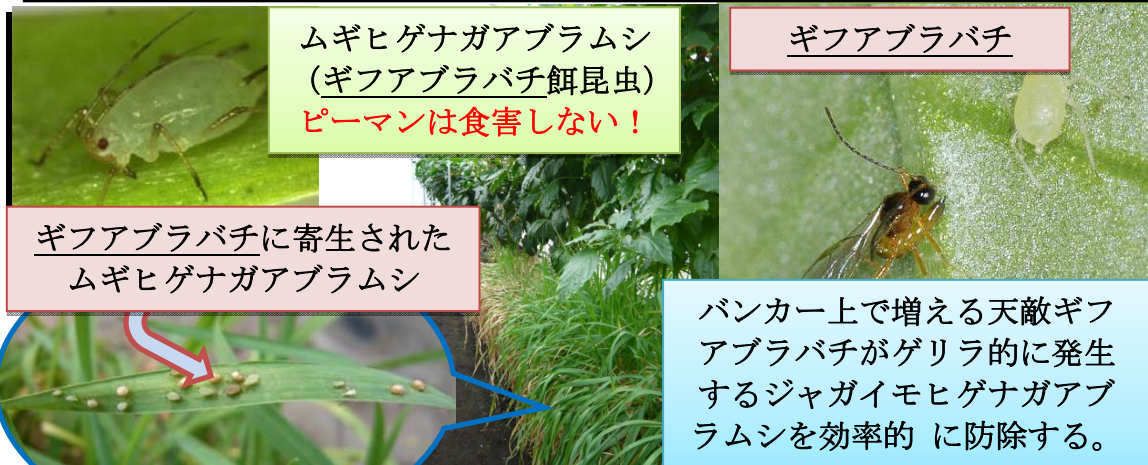
激しく萎縮した葉

<現状と背景>

ジャガイモヒゲナガアブラムシは天敵を核としたピーマン IPM の最後の関門
天敵利用と矛盾しない **防除資材(物理的・生物的)** が求められている。

<研究目標>

ギフアブラバチの生物農薬の登録とバンカー法による防除技術の確立
現地実証試験を実施し、現場ニーズに対応したマニュアルの作成



ムギヒゲナガアブラムシ
(ギフアブラバチ餌昆虫)
ピーマンは食害しない!

ギフアブラバチ

ギフアブラバチに寄生された
ムギヒゲナガアブラムシ

バンカー上で増える天敵ギフアブラバチがゲリラ的に発生するジャガイモヒゲナガアブラムシを効率的に防除する。

大量増殖と製剤化、生物農薬登録

利用技術の現地実証・普及・マニュアル作成

琉球産経株式会社
大量増殖・登録

総括：野菜茶業研究所
放飼技術・バンカー法

鹿児島県農業開発総合センター(普及情報課も参画)ピーマンでの
実用化

長野県野菜花き試験場
カラーピーマンでの
実用化

岐阜県農業技術センター
甘長とうがらしでの実用化

ピーマン類の IPM における最後の関門「ジャガイモヒゲナガアブラムシ」をギフアブラバチのバンカー法(待ち伏せ型)や接種的放飼技術等で防除し、天敵利用を核とした IPM 体系を完成させる。これにより、農家収益の向上(大規模促成栽培ピーマンでは 125 万円/ha)と農薬使用量の削減による生産物の安心を届けることができる